

## 「海外派遣自衛官と家族の健康を考える会」設立に寄せて

大竹進（整形外科医）

青森市で整形外科を開業しています大竹進です。

これまで、整形外科の診療と筋ジストロフィーの医療を担当してきました。

筋ジスは、小学生のころから手足の筋肉が痩せて歩けなくなります。息をする筋肉、心臓の筋肉も障害される難病で、今も根本的な治療法がありません。1990年代は20歳ころに呼吸ができずに亡くなる病気でした。その後、人工呼吸器が進化して、今では40歳以上まで長生きできるようになりました。ただ、手足の筋肉が衰えるので日常生活はすべて介助が必要です。

医療現場では、手足の不自由な子供たちのいのちを助けるために全力投球しています。それでもなくなっていく子供たちをたくさん見送りました。子供が亡くなる時に、ご両親、家族や入院している子供たちはもちろん、私も含めた医療スタッフも、涙が止まらず燃え尽きそうになります。医療スタッフは燃え尽きないように学習し、家族の悲しみを支える医療を提供しています。

戦場で兵士は犠牲となって殺されるかもしれません。また、戦争は、敵を殺すことが目的です。命を助ける仕事をしている医師として、戦争に反対し、南スーダン派遣にも反対してきました。しかし、青森の自衛官が南スーダンに派遣されてしまいました。派遣された自衛官とその家族の皆さんに、医療者としてどのように声をかけたらよいか悩みました。

そして、今は、「早く無事で帰ってきてほしい、人を殺さないで帰ってきてほしい」と願っています。留守を預かる家族も大変心配な毎日を送っていると思います。また、無事に青森に帰ってきて、こころも体も病んで帰ってくる自衛官もいると思います。私たちは、帰還した自衛官も、その家族も丸ごと支えたいと考えています。

青森の自衛官が派遣されることが決まってから、デーブグロスマンの「人殺しの心理学」「人間における戦闘のメカニズム」の2冊を読み、大変大きなショックを受けました。

命を助ける仕事をしてきた者にとって、人を殺すときのことは考えたことはありませんでした。しかし、アメリカ軍は、「一人の敵を倒すのに何発の銃弾が必要だったか」「効率的に殺すにはどのようなトレーニングが有効か」「帰還後にPTSDにならない予防策はあるか」などについて研究しています。

人を殺すときに、体にどのような変化が起こるのか？

戦場では、兵士は100%ストレス性の下痢を経験する、1/4の兵士は尿を失禁し、1/8の兵士は便を失禁する。音が聞こえなくなり、視野が狭くなり、訓練されたことだけを実行する自動操縦状態になるなどの症状が記載されています。また、殺した後は「嘔吐して泣く」そうです。

また、人を殺すときに、こころはどうなるか？

人を殺すときに、記憶がなくなり、夢を見ているような感覚、自分自身を外から眺めている解離現象などが起こるそうです。

ストレスの予防接種の章では、「武器と殺す技術」を手に入れること、そして「殺そうとする意志」を持つように書かれています。「自分に人を殺せるかどうかを見定めるのは、戦闘のさなかにやることではない。それは持てる力のすべてを尽くして、たった今見定めることだ。」「殺人本能をどうすれば表に出すことができるか、自分を深く見つめ直して考えなくてはならない。」そうです。

医療現場では、子供たちの死体験し燃え尽きないために、キューブラーロスの「死に対する心理段階」について学んできました。人殺しの心理学を書いた D グロスマンもキューブラーロスを取り上げていました。キューブラーロスは「否認・怒り・交渉・抑うつ・受容」に分類していますが、グロスマンは戦闘中の殺人を「不安・反射的殺人・高揚感・自責・合理化・受容」と分類しています。

殺人後の自責について「嫌悪感と不快感」がおとずれ、兵士たちは「泣いた、吐いた、そして泣いた」と表現しています。

さらに、グロスマンは PTSD 予防対策として「過去に人を殺した退役軍人が支えることと国民の理解も必要だ」と書かれています。平和憲法下で「人を殺した退役自衛官が一人もいない」「国論が二分されている日本」では、ベトナム戦争と同じような PTSD と悲劇が繰り返されることになりそうです。

一方、青森県はじめ岩手・秋田の 3 県は、自殺率がランキングで上位を占める状態が長く続いていました。2005 年からは、精神医療、心理の専門家だけでなく、市民も参加して地域で支える「心の健康づくり活動」を行ってきました。2013 年からは自死予防活動を行っている団体と個人が「青森いのちのネットワーク」を立ち上げて活動を続けています。

年に一度は、東北 3 県で活動している人たちが一か所に集まり交流を重ねています。昨年は、震災関連自殺が今も増えている福島県からも参加しています。

中学 2 年生の葛西りまさんが「もういじめたりしないでください」と書き残して自ら命を絶った青森市浪岡で、先日、心と体の健康教室を開催しました。自死予防活動に最初からかかわっていただいた精神科医の渡邊直樹先生に「SOS に気づき支えてつなぐ」と題して講演をしていただき、その後は個別無料相談も行いました。

私たち「海外派遣自衛官と家族の健康を考える会」には、医療者、研究者、カウンセラー、戦争体験者らが参加しています。南スーダンに派遣された自衛官は極度の緊張状態に置かれ、かなりの心的負荷がかかると考えられます。また、不安を抱えた家族も気づかないうちに体調を崩してしまうことも懸念されます。

そうしたコンバット・ストレスによる健康への影響を、自衛官やその関係者だけでなく広くコミュニティの中で理解を深めることが大切だと考えています。

私たち「海外派遣自衛官と家族の健康を考える会」は、南スーダンに派遣された自衛官とその家族の SOS そのまま受け止め、丸ごと支え、必要な支援につなげていきます。海外派遣自衛官と家族の健康相談、コンバット・ストレスに関する勉強会や相談会を全国で開催していきます。